

カンファレンス
ソヴィエト・アヴァンギャルドと音響文化
Советский авангард и звуковая культура

講演：

ヴァレリー・ゾロトゥヒン（ルール大学ポーフム）
「1920年代の文学関係の録音とその聴取の技術」

Валерий Золотухин:

Литературные звукозаписи 1920-х годов и
техники их слушания.

オクサーナ・ブルガーコワ（マインツ大学名誉教授）
「未来派とホモジナイザー、あるいは、初期ソヴィエト
のサウンド映画における声、音楽、ノイズ」

Оксана Булгакова:

Футуристы и гомогенизаторы, или голос, музыка
и шум в ранних советских звуковых фильмах.

使用言語：ロシア語（通訳なし）／Language: Russian

日時：2023年3月21日（火・祝）14:00-16:00

March 21 (Tue), 2023, 14:00-16:00 (JST)

会場：早稲田大学戸山キャンパス 33号館 第10会議室

On-site participation: Conference Room 10, 16th Floor, Building 33,
Toyama Campus, Waseda University.

<https://www.waseda.jp/top/access/toyama-campus>

Zoomによるオンライン参加には事前登録が必要です／

Registration for Online participation:

登録URL: <https://list-waseda-jp.zoom.us/meeting/register/tJcuf-igqDMtHtOQuU9M-K7cgTKPgHCUYPpY>



主催： 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究（B）「ロシア・アヴァンギャルドにおける文化現象としての音」（研究代表者：八木君人）

日本学術振興会科学研究費助成事業 国際共同研究強化（A）「社会主義リアリズム前史としてのロシア演劇：アーカイヴ調査に基づくリアリズムの考察」（研究代表者：伊藤愉）

共催： 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究（B）「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」（研究代表者：安達大輔）

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）

「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」プロジェクト（SRC）

問合せ先：naoto-yagi@waseda.jp（早稲田大学・八木君人）

ヴァレリー・ゾロトゥヒン Valeriy Zolotukhin :

文学・演劇研究者 (PhD)。専門は、ロシア・アヴァンギャルド演劇、モダニズムのパフォーマンス文化、初期サウンド・レコーディング、20世紀・21世紀のロシアやヨーロッパの詩のパフォーマンス。近編著書としては、ロシア・フォルマリストのひとりであり、朗読に関する理論家、言語学者であるセルゲイ・ベルンシテイン (1892-1970) とその同僚たちによる、当時、未刊行だった理論的著作を刊行した共編著『鳴り響く芸術のことば：芸術のことば研究室の仕事 (1923-1930)』 (2018)、現代演劇やパフォーマンスに関する論集『Theatrum Mundi. フレキシブルなレキシコン』の編著等。現在、ルール大学ボーフム訪問研究員。



講演概要：

文学史的な録音の存在とその受容 (アレクサンドル・ブローク、ニコライ・グミリョフ、ウラジーミル・マヤコフスキー等、基本的には20世紀の最初の30年くらいの、詩人や作家たちの自身による自作の朗読の録音) に関する報告ですが、中心は、聴取の経験について、より具体的にいえば、文学史的な録音の信憑性をその経験の構成要素として体験することについてです。聴取の経験は1920年代から70年代の間でかわっていききましたが、それは、録音が文学史的なラジオ放送の一部となり、作家の声 that 刻まれたレコードのかたちで世に出ていきました。文学に関する音声録音の聴取の技術の生成と発展のなかで特別な役割を担うのは、個人的、社会的、そして文化的な記憶のメカニズムです。聴取の技術が形成されるプロセスでの記憶の場所についても考えていきます。



講演概要：

映画へのサウンドの到来は、表現力をもつ独立した現象として声を際立たせることになりました。サウンド映画は音現象のカオスを整序しながらそれを意味で覆い、観客に新しい音響感覚を示しました。1930年代はじめの音響の意味論に関する多くのプランは実践に移されることはなかったものの、それらは音の意味論に依拠したロシア未来派の試みに比すことができます。初期サウンド映画の分析で次に本質的な契機となったのは、30年代の録音技術の特性でした。ソヴィエトの映画スタジオはアメリカとドイツのサウンド装置を用いていましたが、同時に、2つのソヴィエトの録音システム (ターゲルのものとショーリンのもの) もテストされていました。初期ソヴィエト映画諸作品は、さまざまなタイプの音響現象を操作するために似たような戦略を用いていました。そこでは音楽が、音響的なある次元を別の次元へと移すメディア、手段となったのです。ノイズと静寂は音楽となり、会話のことばは歌となり、それらが1930年代のソヴィエト映画における声の使用やソヴィエト演劇における発声の方法の変化に影響を与えました。そうしたことを考えていきます。

オクサーナ・ブルガーコワ Oksana Bulgakowa :

マインツ大学名誉教授。専門はロシアとドイツの映画研究で著作多数。とりわけ『セルゲイ・エイゼンシテイン：伝記』 (1998) やエイゼンシテインの草稿『メソッド』4巻の編集 (2009) で知られるが、『FEKS：エキセントリック俳優の工場』 (1996) や『ジェスチャーの工場』 (2005) といった映画に関する著書の他にも、ロシアの音響文化を扱った『文化現象としての声』 (2015) もある。現在、上海理工大学美術・デザイン学院客員教授、ドイツ研究振興協会 (DFG) の支援を受けたマインツ・ハノーバー両大学間のチーム研究「映画研究のための自動化された視覚コンテンツ分析」に従事。

